神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	石崎源六版『三五景一覧』の絵師たち ―「人名録」を手がかりに―
著者	桑山童奈
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 41 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2014 年（平成 26 年）10 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

石崎源六版『三五景一覧』の絵師たち
―「人名録」を手がかりに―

桑山童奈

【要旨】
東海道の三番目の宿駅、神奈川宿は坂道の台からみる眺望の良さで知られ、海に面した座敷でくつろぐ人々を歌川広重（初代）も錦絵に描いている。その茶屋の一つに石崎源六があった。俳諧を嗜んだと伝えられる石崎源六は幕末期に神奈川宿周辺の光景を紹介する二つの出版物を制作した。その一つである『三五景一覧』（安政五年・一八五八刊）には十五図の台町からのぞむ光景が描かれ、狂歌、漢詩などが添えられている。本稿では挿絵を描いた絵師について調査した結果、当時の人名録に多く見いだせたので紹介する。

【キーワード】
東海道　神奈川宿　出版

はじめに

現在の神奈川県域には川崎から箱根まで東海道の宿駅が九つあり、江戸と京都を結ぶ旅の要所であった。また、風光明媚な金沢八景や鎌倉、信仰の対象の大山と江の島、温泉地の箱根など、江戸から小さな旅を楽しめる場所が複数あった。これらの名所へも東海道から分かれ道を進むルートがあった。

神奈川宿の石崎源六（?～一八七四）は茶屋の経営者であるかたわら、桃郷（とうきょう）の号を持つ俳人でもあった[1]。石崎源六の名は道中記の『五海道中細見記』（図1　大城屋良助版、安政五年刊）ほかに見られる。石崎は神奈川宿の台町からのぞむ十五ヶ所を選定し、出版物を二種制作した。一つは歌川広重（初代）の署名がある一枚摺の大判錦絵で「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」（図2）である。神奈川宿周辺を鳥瞰図でとらえ、十五の場所を短冊で示している。左の枠外に「東都　金花堂製」とあり、「戊安政五午初夏」の年紀が記される。この年は初代広重の亡くなった年である。画面右下には「此図は一望を記すのみにして諸大家の高作は名勝一覧に挙たればこゝはたゝ大略を記すのみ也　桃郷記」とある[2]。

その「諸大家の高作」に該当するのが本稿で取り上げる冊子体の『三五景一覧』である。「三五」は十五を洒落てあらわしたのであろう。一図は見開き、ほか十四図は片面に描かれ、狂歌や俳諧、漢詩が添えられる、狂歌本に似た体裁である。挿絵はいずれも簡略な筆致の絵で淡彩で摺られている。画面の絵の間に漢詩や俳諧などが記されており、これらの人物も絵師と関連があるのではないかとも思われるが、本稿では触れない[3]。

本書には署名だけでは、現代の人名辞典では追うことのできない人物が多い。そのため、同書の刊行前後の「人名録」をいくつか調べてみた

ところ、該当すると思われる絵師たちを見出すことができた。以下に、それらの絵師たちを紹介する。

一　『三五景一覧』の成立と構成

ここで先に「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」と『三五景一覧』以前に出版された神奈川宿周辺の絵図を紹介する。

この周辺を俯瞰する構図で描いたものに『江戸名所図会』の「神奈川総図」（図3）と「細見神奈川絵図」（図4、天保十五年・一八四四刊）がある。長谷川雪旦が挿絵を描いた斎藤幸雄、幸孝、幸成（月岑）編『江戸名所図会』（天保五、七年刊）巻之二に掲載される「神奈川総図」は本覚寺から西へ進み、本牧近くまで三連続の見開き画面でとらえており、繋げればパノラマ画面となる。「細見神奈川絵図」は墨一色の摺で、画面の中央にある権現山を囲むように東海道が走る様子を俯瞰する構図である。右下に「梧ヵ斎筆」と「彫工小泉辰五郎」とある。[4] 左下に「金浦漁街　梧楼之記」とあるので、神奈川宿周辺の富裕者層が出版した可能性が高いと考える。筆者は以前、「細見神奈川絵図」と「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」を在地出版の例として紹介したことがある。[5]

『三五景一覧』の構成は、序文、題字、絵と俳諧、狂歌などからなる本編と刊記である。俳諧には桃郷自身のものもある。本稿では神奈川県立図書館本を使用する。

安政四年十一月に記されたとある序文（図5）で興味深いのは「中にも東海道は我国第一の大路なれば師宣が分見の折本何某が駅路之鈴ちかくは名所図会等の書あまたものしてくはしけれ」の箇所で、いくつかの「道中記」が挙げられていることである。「師宣が分見の折本」とは遠近道印作、菱川師宣画の「東海道分間絵図」（元禄三年・一六九〇初版）であろう。現存する「東海道分間絵図」の装幀には折本も巻子もあるというが、[6] ここでは「折本」と断定しているのは興味深い。『駅路之鈴』は楽阿弥陀仏と男が旅する小説、『東海道名所記』（万治二、三年・一六五九、六〇ころ刊）と思われる。「名所図会」とは第一に秋里籬島『東海道名所図会』（寛政九年刊・一七九七）のことであろう。また、『江戸名所図会』も東海道を程ヶ谷宿まで行き、金沢八景（現在の横浜市金沢区）周辺まで紹介している。前述のように神奈川宿周辺は鳥瞰図も含まれるので、神奈川宿界隈の人々には馴染みの深い書物であったと推測する。つまり『三五景一覧』の序はこれらの「道中記」が親しまれていた証といえる。巻末には「安政五午年春梓行　武蔵金川台　石崎桃郷蔵板」とある。

本書のように本職の版元ではない人物が自身で書物を出版した場合、執筆者と交流があったものと考えたくなる。[7] 石崎が江戸の文化人との交流を持っていたことや、また、石崎の茶屋に立ち寄る江戸からの旅人に揮毫を依頼することもあったことは想像に難くない。本稿では本書の絵師たちがいかなる人物であったかの情報を「人名録」に求めてみた。

当時、出版された人名録とはいかなるものであるか。さまざまな形式のものがあるが、基本的には人名が書、画、歌などの専門領域とともに紹介されている。人名と住所のみのものから、畑銀雞編『書画薈翠』には商品見本のような絵を収録している。おおむね職業別電話帳程度の情報に過ぎず、作品を依頼する判断をするためには情報量が少ないようにも思える。

今回は刊年の安政五年に近い時期に刊行された人名録を参照することとし、森銑三、中島理寿編『近世人名録集成』に収録された人名録のうち『江戸文人寿命附』（畑銀雞編、初編、嘉永二年〈一八四九〉刊、二編、嘉永三年刊）、『安政文雅人名録』（弘文堂〈細谷義兵衛版〉安政七年〈一

八六〇）を中心に、適宜、ほかの人名録もあたってみた。[8]『江戸文人寿命附』は面白おかしく紹介する、という体裁で住所に加え、似顔絵と狂歌と七〇〇年から千年くらいの寿命が記されるため、情報がやや多い。しかし、人物の配列には規則性がないようにみえる。『安政文雅人名録』は専門分野、号、名前、住所が基本で、在宿日（面会日か）の情報が記されたものもある。配列は号のいろは順である。

『三五景一覧』の絵師たちは、柴田是真以外は作品が殆ど紹介されないため、号や印、署名を知ることは困難である。したがって、名前が一致しても本当に同一人物か確定することは困難である。しかし、ここで「人名録」で「画」と紹介される人物の中で、同名の人物を紹介する。

二　挿絵と人名録の照合

（a）二ウ三オ　清水山清水（図6）　署名　三拙　朱印　三拙

唯一の見開き画面。特別待遇といえる。署名はわかりづらいが、印から「三拙」と読んでみた。

『江戸文人寿命附』に出口三拙という人物が紹介される。[9]同書によれば茅場街（町）に住み、「大極上々吉寿九百年」で「年々にその名ハ江戸になりわたり評判のよきうでのすがた」。絵は台町にあり清水山と呼ばれた大日堂[10]か、右下、屋根の下の看板に「石」の文字。石崎の茶屋と思われる。

（b）三ウ　将軍山桜花（図7、右）　署名　石宝写　朱印　石宝

この絵から各一丁の画面となる。『安政文雅人名録』に「栗山石宝　名壽字子考号快雪堂　両国村松町」[11]とある。『安巳新撰文苑人名録』にも名がある。[12]将軍山とは飯綱権現社のある山のことと思われる。

（c）四オ　本覚寺宿鴉（図7、左）　署名　英一笑　朱印　容与

英一笑は国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』でも紹介される。[13]その以前は『古画備考』で紹介されている。[14]前者によれば文化元年（一八〇四）生まれで、安政五年没。祖父は英一蝶にはじまる英派の継承者となった二代高嵩谷（一七九九―一八七五）。本覚寺は、『江戸名所図会』にも紹介され、横浜開港後はアメリカ領事館としても利用されたことで知られる。

（d）四ウ　芝生秋（図8、右）　署名　凌雲小史　朱印　凌雲

『江戸文人寿命附』二編に藤堂凌雲の名[15]がある。「大阪で花をさかせて江戸へ来て　実をむすびたる　筆のたふとさ　極上々吉寿九百年　裏茅場町」。『安政文雅人名録』[16]には「名　良驥　字　千里　号痴仙　在宿三八　下谷長者町　藤堂勝太郎」とある。「在宿三八」とは三と八のつく日が面会日という意味であろう。

平成二五年、城西国際大学水田美術館で行われた「九十九里浜の網主文化　齋藤滄洲と文人の交友」展（会期　平成二五年十月一日～二六日）で凌雲の明治十四年（一八八一）の作品が紹介された。[17]この作品は現在の千葉県山武市にいたいわし漁の網主の依頼で描かれ、伝わったといい、凌雲の書簡も現存するという。文化六年（一八〇九）生まれで、明治十九年（一八八六）没。伊勢の津の生まれという。

芝生（しぼう）の浅間神社には富士の人穴とよばれる横穴があり、種々の『道中記』や葛飾北斎の浮世絵にも繰り返し描かれる神奈川宿のランドマークがあったが、ここでは取り上げられていない。

（e）五オ　鹿野山望月（図8、左）　署名　白泉筆　朱印　白□

私家版の人名録『安巳新撰文苑人名録』に出口白泉という名がある。[18]

鹿野山は房総半島の山。「細見神奈川絵図」にも描かれている。房総半島まで見える眺望が、台町の売りであった。

（f）五ウ　平沼塩煙（図9、右）　署名　旭峰写　朱印　子明

『安政文雅人名録』には「画　旭峯　名暁　字子明　霊岸島長崎町　佐藤長兵衛」。[19] 本図中の印も「子明」と読めるので、同一人物の可能性はかなり高いであろう。さかのぼって、『江戸文人寿命附』には「画　佐藤旭峰　年々に修業もみちて　高名は　旭と共にのぼりたるべし　大上々吉　寿未定　霊岸嶋」とある。似顔は前髪のある姿で「大上々吉寿未定」という言葉からも、当時は少年というべき年頃であったか。[20] 平沼での製塩の煙。

（g）六オ　芙峯遙望（図9、左）　署名　清可女　朱印　□□

井上清可という名が『安政文雅人名録』[21]にある。「せ」の項にみられるので、「せいか」と読むのであろう。「画　清可　文雄女　日本橋坂本町　井上清可」とある。同書に「文雄　号柯堂　又調鶴　日本橋坂本町　井上元真」[22]とあり住所が一致するので、この「井上文雄」の娘か。本書の「清水山清水」に文雄と署名された歌がある。『江戸文人寿命附』では同一人物と思われる「文雄」が茅場町在住とされている。[23] 芙峯こと富士山をのぞむことは東海道の旅でも大きな楽しみであったろう。いうまでもなく、画題としては十五景のうち、もっとも人気のあるものである。それを紅一点の女性に与える意図をいかに考えるべきか。

（h）六ウ　港千鳥（図10、右）　署名　探斎武一筆　朱印　□

『安政文雅人名録』に「武一　名武一　号探斎　又　五清堂　武清男　八丁堀竹島町　喜多武一」とある。[24] 喜多武清は谷文晁の弟子。探斎武一は『近世画史』（細川潤次郎著、明治二四年）によれば武清の養子であり、明治初年に亡くなる。[25]『江戸文人寿命附』二編にも喜多武一の名があり、「兄の跡をつぎたるめでたきやこれぞ二代の画師のまれもの」とある。[26] この兄は『近世画史』で嘉永年中に亡くなったとする武清の実子か。港は神奈川港と呼ばれた場所であろう。

（i）七オ　宮洲の汐干（図10、左）　署名　是真　朱印　令哉

現代ではとくに蒔絵師として知られる柴田是真（文化四年・一八〇七～明治二三年・一八九一）は『三五景一覧』の絵師の中で、一番の著名人であろう。『江戸文人寿命附』[27]をはじめ、今回調べた「人名録」のすべてに名が見られる。宮洲は「神奈川台石崎楼十五景一望之図」では権現山のふもとにある。

（j）七ウ　野毛海苔舟（図11、右）　署名　林斎　朱印　林斎

岡島林斎か。『日本人名大辞典』によれば、生年は不明だが慶応元年（一八六五）没。[28] 幕臣で狩野素川の門人。『江戸文人寿命附』にも『安政文雅人名録』にも名が見える。[29]

（k）八オ　横浜漁火（図11、左）　署名　玉堂絵　朱印　二口

署名が判読しづらいが「玉堂」と読んだ場合、『安政文雅人名録』に深川伊豫橋に住む栗原銀三郎がいる。『古画備考』[30]にその抜粋が収録される『江戸広益書画人名録』（天保七年刊）には白山雉声ヶ窪在の「玉堂　栗

原銀蔵」がいる。同一人物か、血縁者か。

（l）八ウ　権現山夕陽（図12、右）　署名　素真　朱印　素真

『安政文雅人名録』の「素真　号揺月斎　神田於玉ヶ池　山形素真」に該当するか。[31]

（m）九オ　洲乾　雪（図12、左）　署名　英一蜻　朱印　信光ヵ

英一蜻は『安政文雅人名録』に茅場町薬師前に住むとある。[32]『浮世絵大事典』によれば、前述の英一笑の後継者で天保十年（一八三九）生まれ、大正五年（一九一六）没。幕府の時代には北町奉行所の同心であったという。[33]

（n）九ウ　本牧舶風（図13、右）　署名　翠湖寫　朱印　金□

『江戸文人寿命附』『安政文雅人名録』とも小松原翠湖という人物がいる。[34]前者では茅場町、後者では茅場町地蔵橋通に在住。『当時現在広益諸家人名録』（天保七年版および十三年版）には「翠湖　小松原坦蔵　名誠義、字行源、號希唐菴、翠渓男、八丁堀竹島組屋敷」と記されている。[35]

父の小松原翠渓は『当時現在広益諸家人名録』（天保七年版）に「天保五年十二月晦日歿五十四」と記される。[36]

（o）十オ　洲崎神社（図13、左）　右下署名　一蒲　朱印　一蒲

左下署名　鷗波書　朱印　照印

一蒲は『安政文雅人名録』に浅草弁天山在住の斎藤伝兵衛がいる。[37]左下には「鷗波書」とあるので、「書」の人を探したところ同書に海賊橋在住の「鷗波　西村宗助」がいる。[38]絵をみる限り、両者の分担はよくわからない。十五図の中で本図のみ、季節など情景を示す言葉を持たない。

おわりに

以上、『三五景一覧』の挿絵にある署名に該当しそうな人物を、年代が近い「人名録」に探してみた。英一蜻のように画姓・名が一致すれば同一人物であることを確実視できるが、号だけの一致では別人の可能性もあるだろう。実際に桃郷がどのように人選を行ったかを知るすべはない。

前述したように、交流のあった人物や茶屋に立ち寄った人物である可能性もあるだろう。しかし、市場に流通していた「人名録」を手がかりに、絵師に依頼した可能性もあるのではないか。前項で紹介した人物は「人名録」から変更なければ、みな江戸の住民、かつ絵をなりわいとする人物である。つまり、神奈川宿周辺の趣味人ではない。桃郷は挿絵を「江戸の文化人」に依頼した、とはいえると思う。神奈川宿は江戸から遠くはなれた田舎というわけではないが、「江戸の文化人」を尊び、その力を借りたいという意図があったのではないか、と考える。

本稿は太田記念美術館、平成二一年度第二六回研究助成および平成二五～二七年度科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金【基盤件研究C】（課題番号　二五三七〇八一七）の成果の一部である。

註

(1)『神奈川県史　別編一　人物』神奈川県、昭和五八年、六三頁、「いしざきとうきよう」の項。

(2)横浜開港資料館蔵の「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」は画面左下「宮洲汐干」の下にある「羽沢屋」と「大黒屋」の位置が本館蔵のものとは逆である。また、「名古屋」の左に「本陣鈴木」という短冊があるなど、版が異なる。したがって、少なくとも二種はある。横浜市歴史博物館編集・発行『東海道と神奈川宿』(平成八年)、図版番号七五参照。

(3)『郷土よこはま』一〇八、一〇九号(昭和六三年)四五～六六、七一頁に石井光太郎氏による俳諧などの釈文と解題がある。一〇〇頁の序文の釈文も参考にした。

(4)小泉辰五郎の名前は『浮世絵大百科』第三巻(大修館書店、昭和五七年)「彫師と摺師」には見当たらない。「細見神奈川絵図」の外題は画中に記されてものではなく、前掲註(2)『東海道と神奈川宿』での名称を踏襲した。

(5)拙稿「浮世絵師と地方のつながり―浮世絵師の署名がある〈地方出版物〉について―」『太田記念美術館紀要　浮世絵研究』第二号、平成二四年。

(6)小林忠『日本の美術三六三号　師宣と初期浮世絵』平成八年、二六頁。

(7)筆者も平成二五年に開催した当館の特別展「江戸時代かながわの旅―道中記の世界―」とその展覧会図録(八六頁)でこのように紹介した。しかし、人名録に該当する名前を多く見いだせたため、本稿で紹介することとした。

(8)『近世人名録集成』第一、三巻、勉誠社、昭和五一年。

(9)『近世人名録集成』第二巻、三五〇頁。

(10)『新編武蔵風土記稿巻之七十　橘樹郡之十三』二九四、上、参照。

(11)『近世人名録集成』第二巻、一七八頁。

(12)『近世人名録集成』第三巻、二四一頁。

(13)東京堂出版、平成二十年、四〇一頁。

(14)朝岡興禎著、太田謹『増訂　古画備考』吉川弘文館、明治三七年、一九三四頁。

(15)『近世人名録集成』第二巻、三五二頁。

(16)『近世人名録集成』第二巻、一四五頁。

(17)『九十九里浜の網主文化　齋藤滄洲と文人の交友』城西国際大学水田美術館、平成二五年。

(18)『近世人名録集成』第三巻、二〇二頁。

(19)『近世人名録集成』第二巻、一七〇頁。

(20)『近世人名録集成』第二巻収録本には掲載されていないが、同じ、東京都立中央図書館加賀文庫蔵錯簡のある別本に掲載されている。

(21)『近世人名録集成』第二巻、一八〇頁。

(22)『近世人名録集成』第二巻、一六三頁。

(23)『近世人名録集成』第二巻、三三五頁。

(24)『近世人名録集成』第二巻、一六三頁。

(25)細川潤次郎『近世画史』巻之四。佐々木英理子編「画家略伝」のうち喜多武清の項『江戸文化シリーズ　№二三　谷文晁とその一門』板橋区立美術館、平成十九年参照。

(26)『近世人名録集成』第二巻、三三五〇頁。

(27)『近世人名録集成』第二巻、一七八、二三二頁。

(28)『日本人名大辞典』平凡社、一九七九年、第一巻、六二九頁。

(29)『近世人名録集成』第二巻、一四六、二四九頁。

(30)『古画備考』三十下、近世。『近世人名録集成』第二巻、一七〇、二四五頁。

(31)『近世人名録集成』第二巻、一五四頁。

(32)『近世人名録集成』第二巻、一三七頁。

(33)前掲註(13)『浮世絵大事典』四〇一頁。

(34)『近世人名録集成』第二巻、一八一、三五〇頁。

(35)『近世人名録集成』第二巻、四七、八三頁。前掲註(30)『古画備考』も両書を引用している、一三一五、一三二一頁。

(36)『近世人名録集成』第二巻、五八頁。

(37)『近世人名録集成』第二巻、一三七頁。

(38)『近世人名録集成』第二巻、一四八頁。

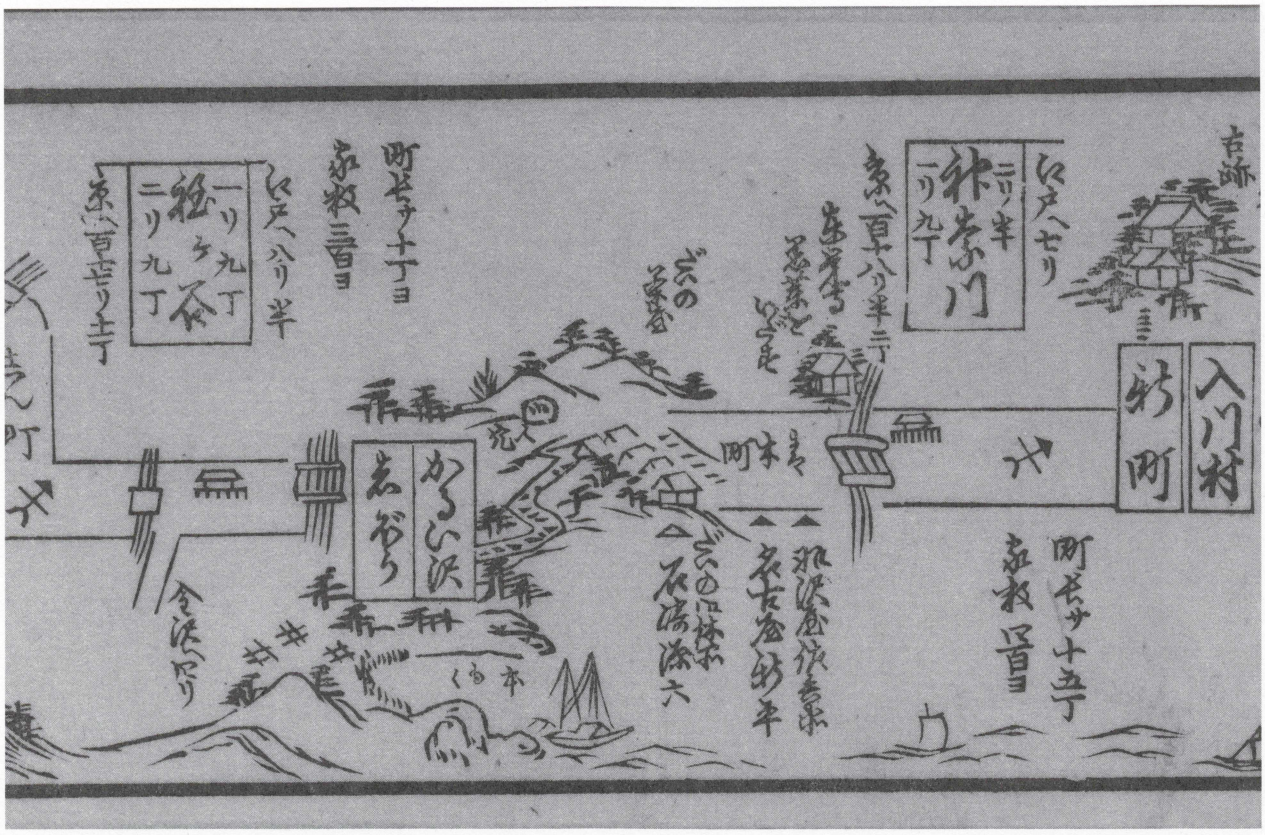


図１　『五海道中細見記』安政５年（1858）　　神奈川県立歴史博物館

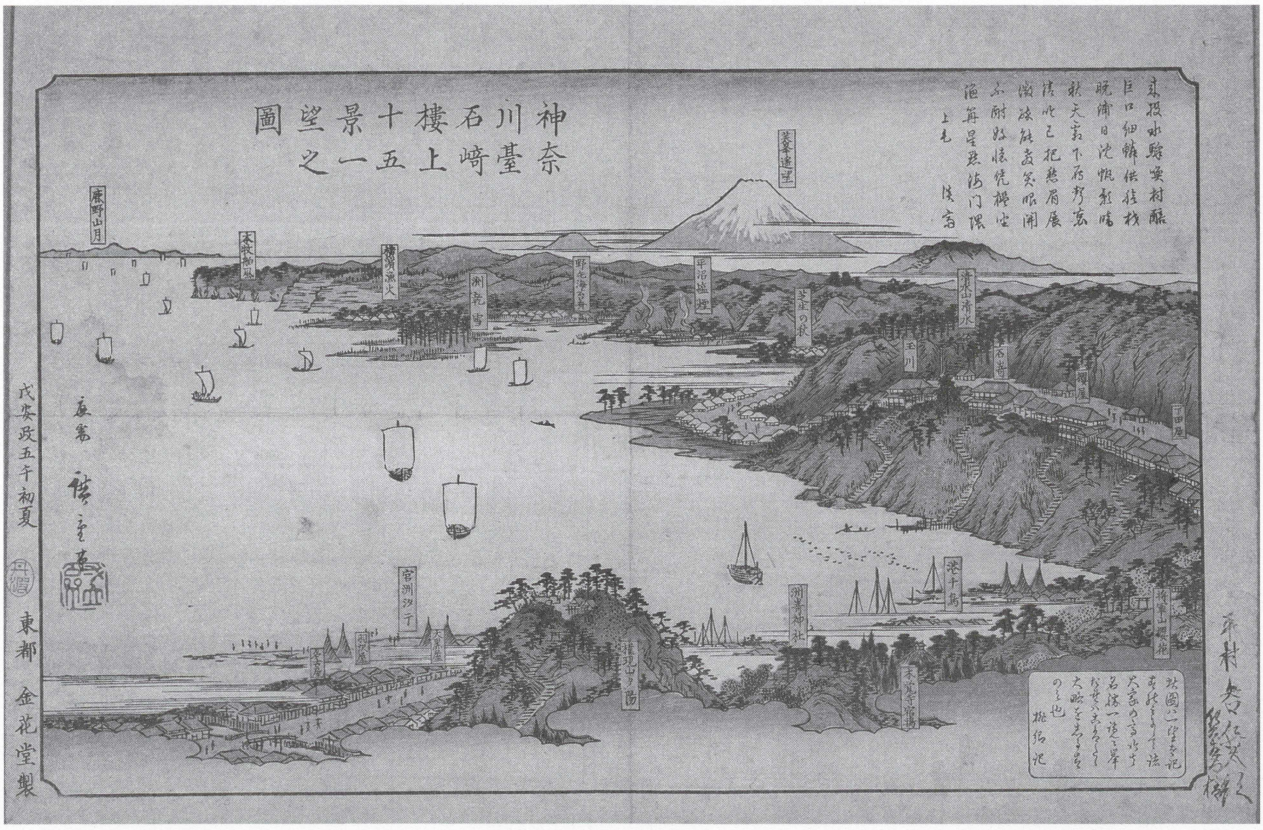


図２　歌川広重（初代）　神奈川台石崎楼上十五景一望之図　安政５年　　神奈川県立歴史博物館

図 3-1 『江戸名所図会』神奈川総図

神奈川県立歴史博物館
（以下同じ）

図 3-2 『江戸名所図会』神奈川総図　其二

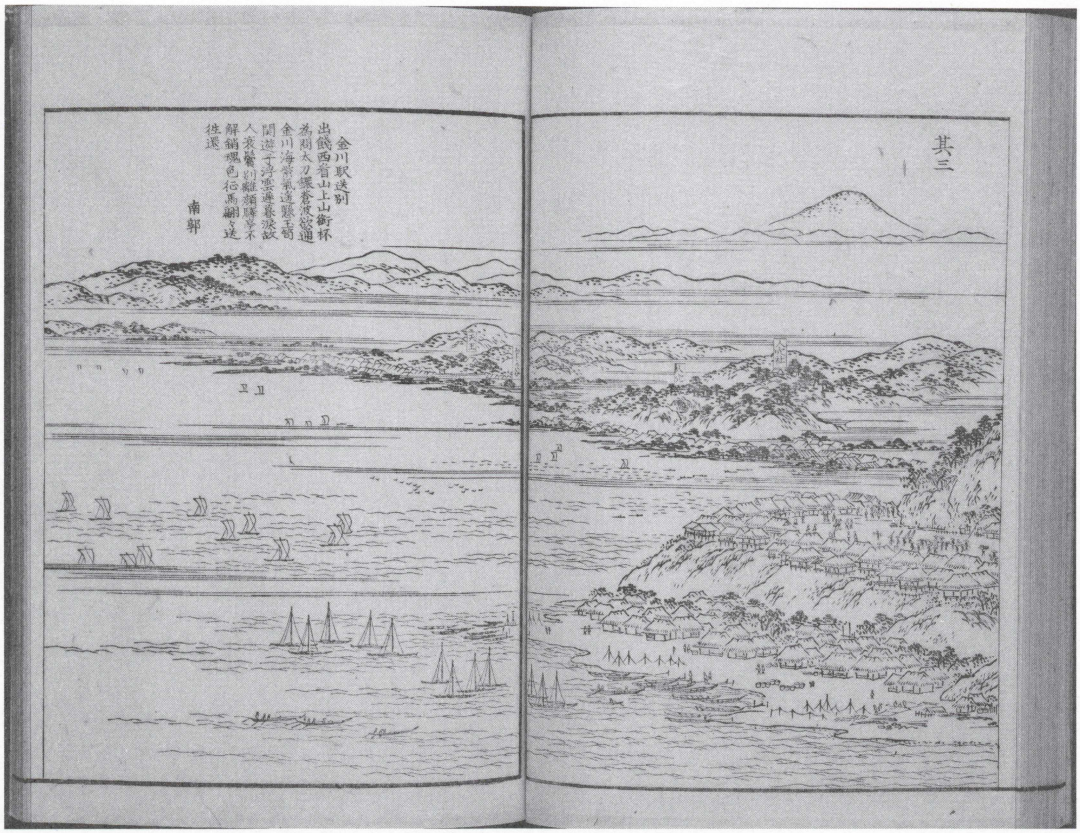


図 3-3 『江戸名所図会』神奈川総図　其三

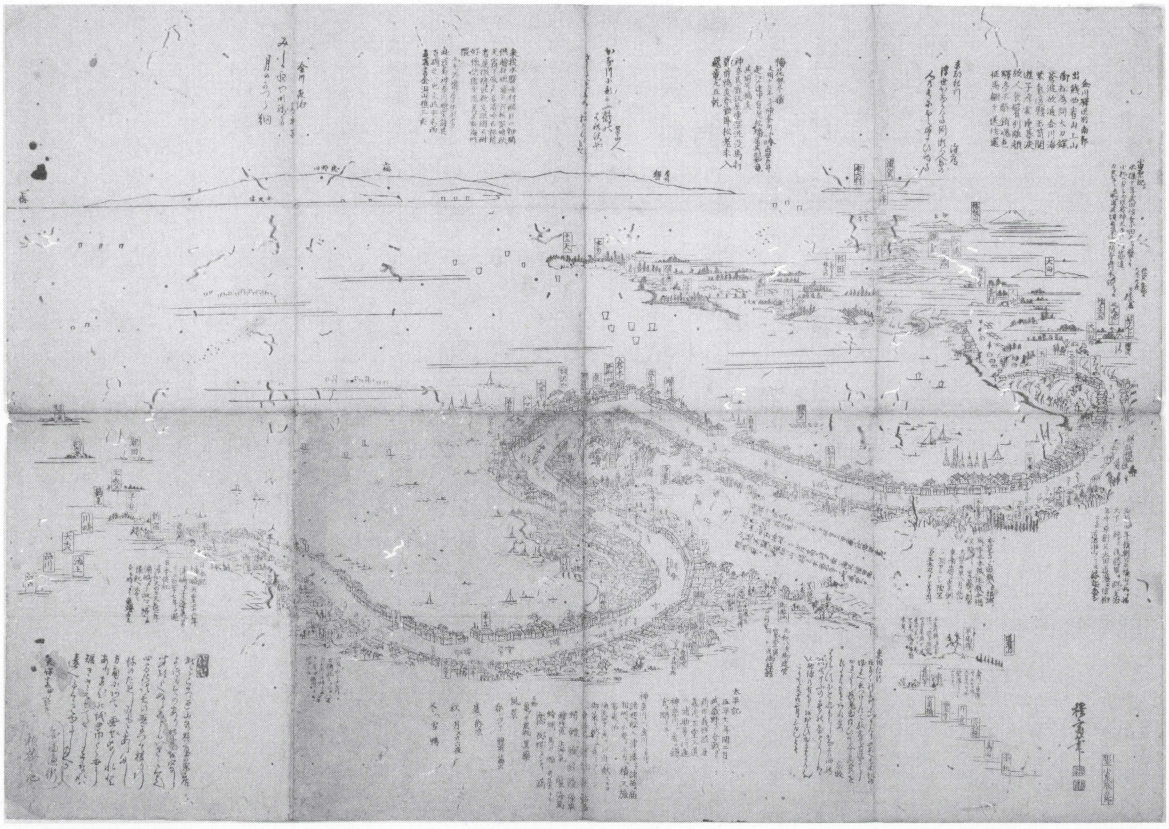


図 4　細見神奈川絵図、天保 15 年（1844）　　神奈川県立歴史博物館

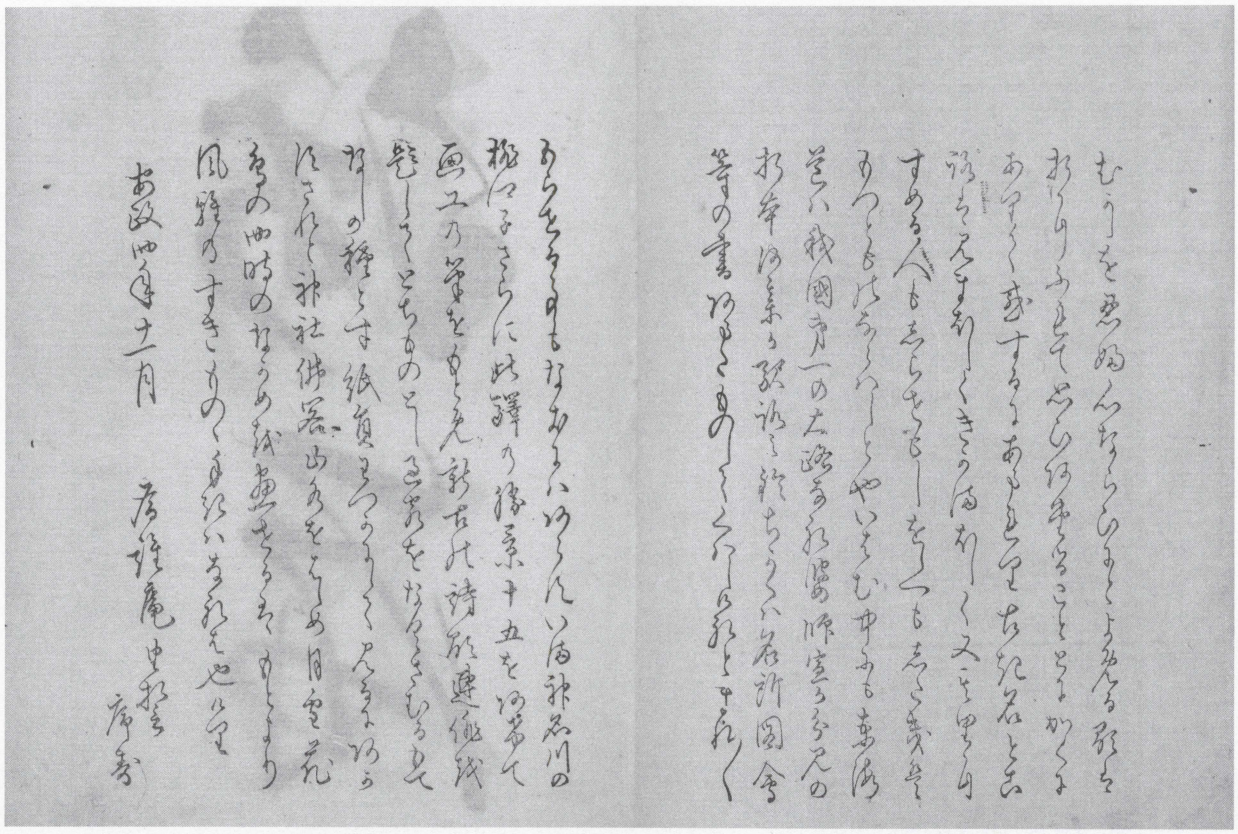


図５　『三五景一覧』序文　　神奈川県立図書館（以下同じ）

むかしを忍ふ心ならひにとよめる歌は
折々にふれて思ひあたることとにかくに
ありて惑するにあたれり古き名とこ
ろは見まほしくきかまほしく又其里に
すめる人もしらせもしをしへもしたきは
もっとものならはしとやいはむ中にも東海
道は我国第一の大路なれば師宣か分見の
折本何某が駅路之鈴ちかくは名所図会
等の書あまたものして〳〵はしけれとまれ〳〵
もらせる事もなきにはあらすいま神名川の
桃郷子さらに此驛の勝景十五をあけて
画工の筆をもとめ新古の詩歌連俳を
題してとちものとし過客をなくさむるもて
なしの種とす紙員わつかにして見るにあか
すされと神社仏閣山水をはじめ月雪花
鳥の四時のなかめを尽さるゝはもとより
風雅のすきものの手きはなれば也けり

安政四年十一月　為誰庵申誓カ

序ス

（釈文は『郷土よこはま』一〇八、一〇九号、昭和六三年、四六頁を参照した）

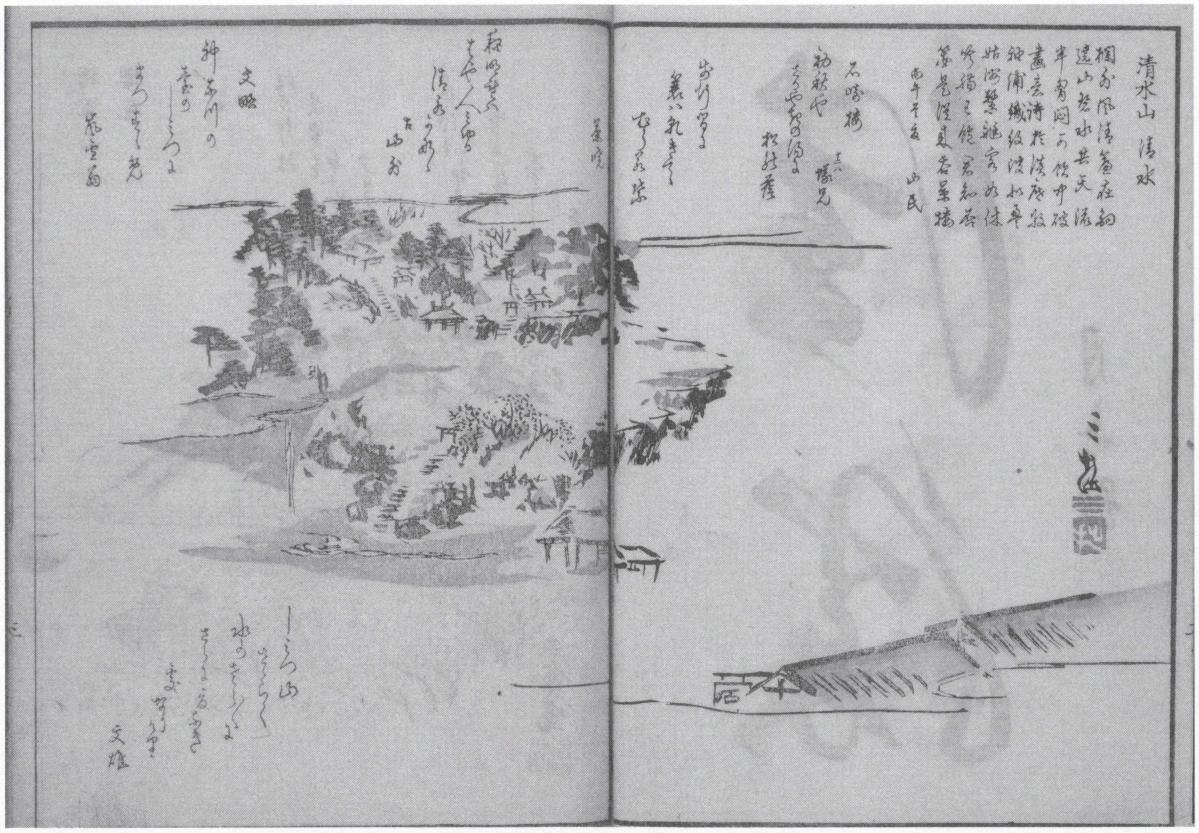
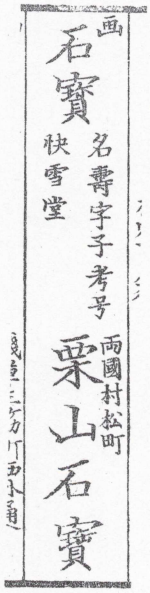


図６ 『三五景一覧』 清水山清水

『江戸文人寿命附』
（東京都立中央図書館特別文庫室　以下、同じ）

図７ 『三五景一覧』 将軍山桜花　本覚寺宿鴉



『安政文雅人名録』
（国文学研究資料館　以下、同じ）

図８ 『三五景一覧』 芝生秋　鹿野山望月

『安巳新撰文苑人名録』
（東京都立中央図書館特別文庫室）

『江戸文人寿命附』

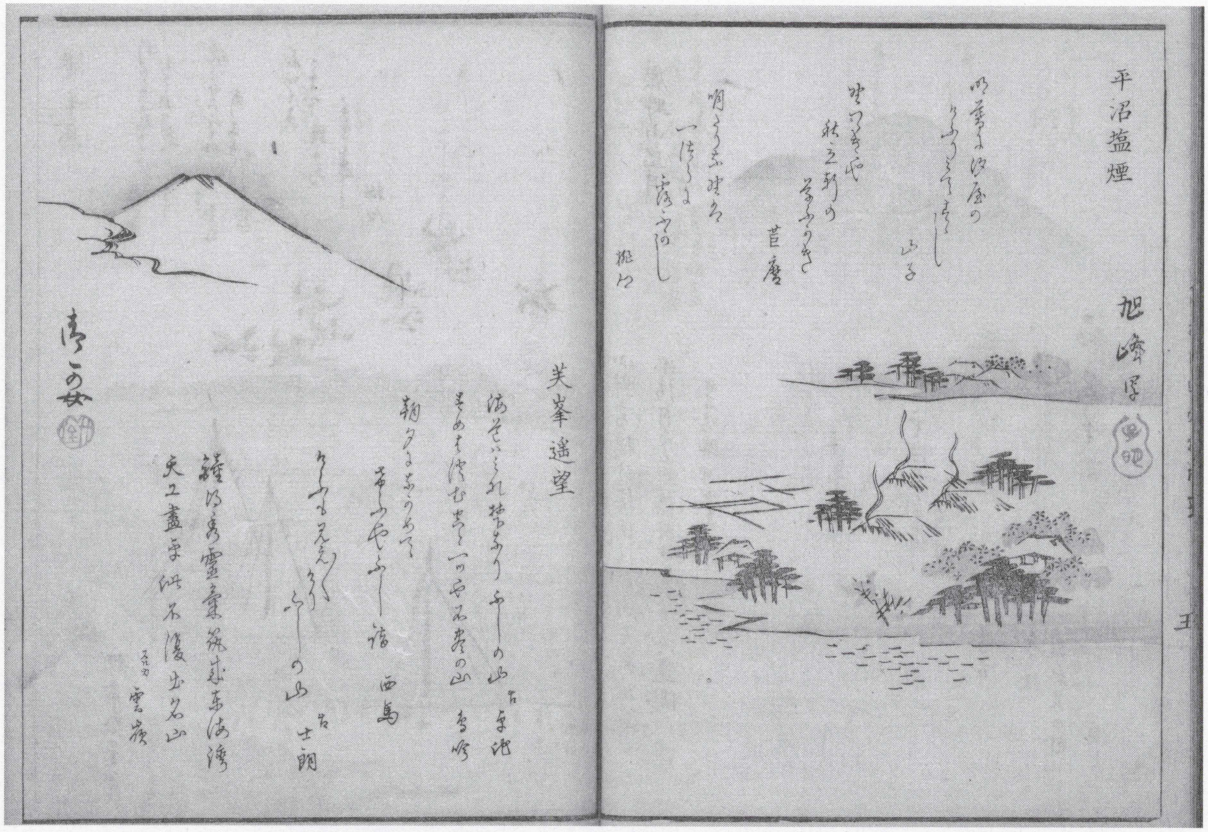
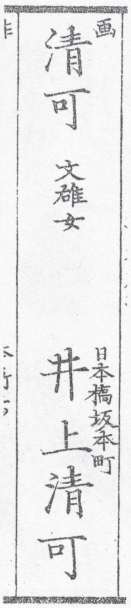


図９『三五景一覧』　平沼塩煙　芙峯遥望

『江戸文人寿命附』



『安政文雅人名録』

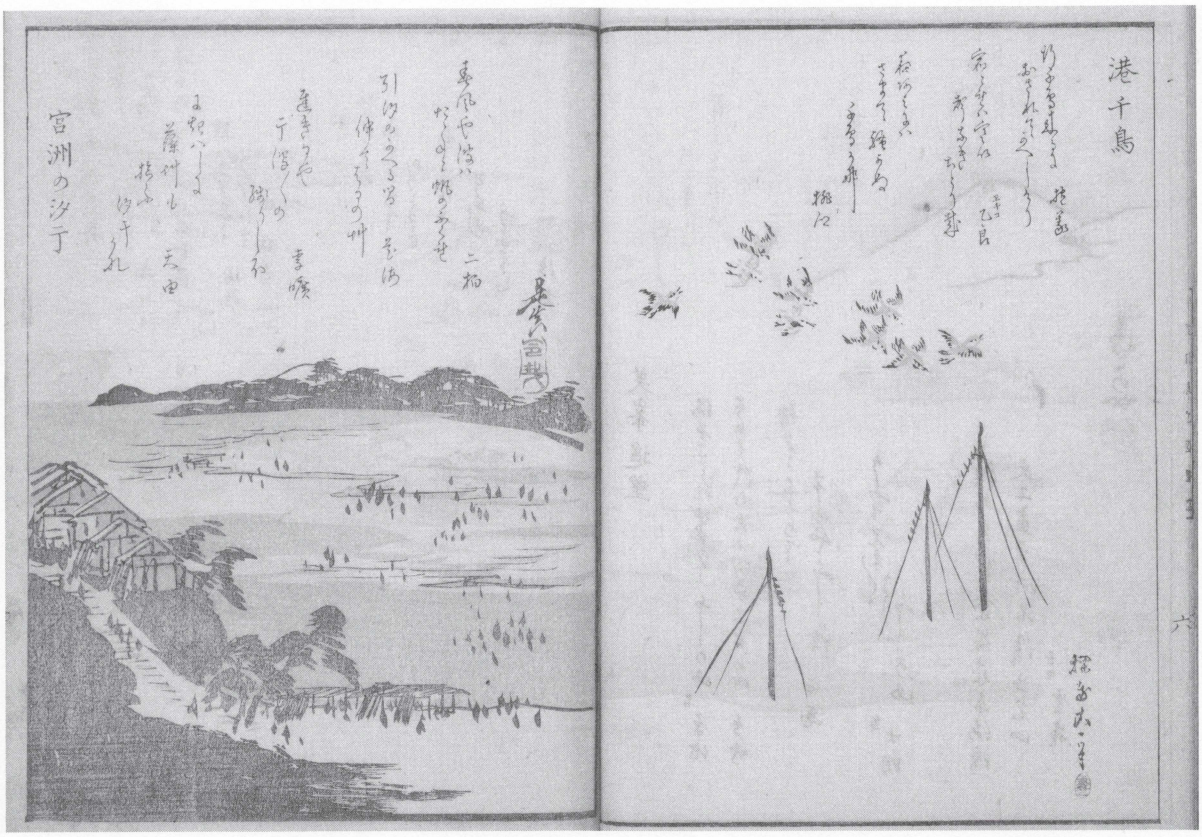
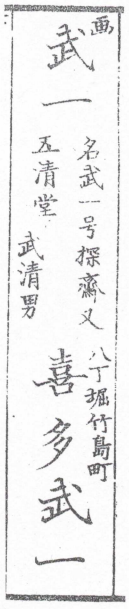
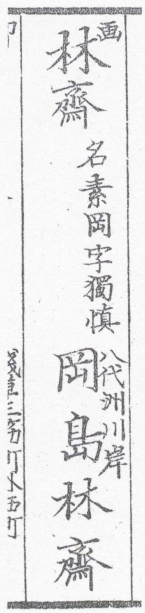


図 10 『三五景一覧』 港千鳥　宮洲の汐干

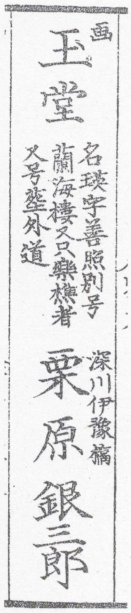


『安政文雅人名録』

図 11 『三五景一覧』 野毛海苔舟　横浜漁火

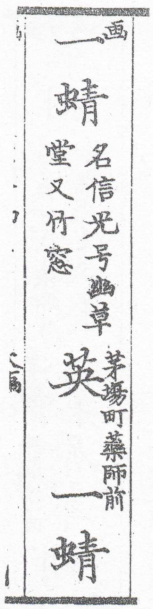


『安政文雅人名録』



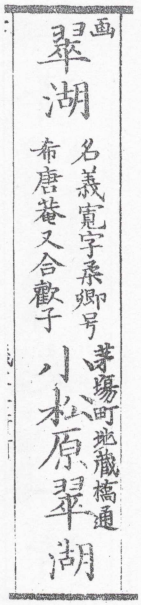
『安政文雅人名録』

図 12 『三五景一覧』 権現山夕陽　洲乾雪

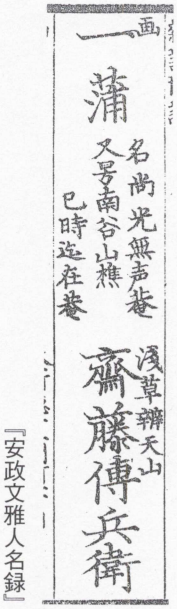


『安政文雅人名録』

図 13 『三五景一覧』 本牧船風　洲嵜神社


画
翠湖
名義寛字桑卿号
茅場町地蔵橋通
布唐菴又合歡子
小松原翠湖

『安政文雅人名録』


画
一蒲
名尚光無声菴
又号南谷山樵
巳時迄在菴
浅草辨天山
齋藤傳兵衛

『安政文雅人名録』